

# ひよく 比翼の束 第六十二回

## 教えられたこと

二月三日は節分、そして立春と確実に季節は進んでいる。

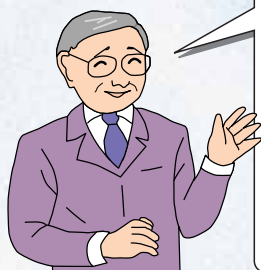
まもなく平成二十四年度が終わる。振り返ってみると、矢板市にとってはこれまでにない激動の年であったと思っている。

次々と降りかかる難題課題に対応する中で、さまざまなことを教えられ考えさせられた。これまでの人生の中で最も濃縮された一年であったと思いついている。

私も一人の人間である。事の重大さに対応の難しさに耐えられなくなつて、弱音を吐いたり、時には逃げ出したくなることも少なくない。

しかし、このような時に、いつも自らの戒めとなつているのは市長としての責任と使命感である。さまざまな苦難に直面して教えられたことは

私（市長）の思いや願いなどを市民の皆さんにお伝えします。



○「耐える力を備えなければならない」ということである。

行政が取り組む課題は、人間が生きてゆく上での問題であり、すべてが人と関わりの中で生じる問題である。

この問題が解決できなければ市民の日々の生活が大混乱が生じる。しかし解決の方途が見え出せず、日に日に迫る約束の日に胸が締めつけられる日が続いた。

幾度となく暗礁に乗り上げ、その苦しみの中で教えられたことは、誠意を尽くして信頼関係を築くこと、このことなぐして問題の解決はないということである。

自分が今いる立場の中で、誠意を尽くして精一杯努力すること以外にはないと、神にすがる思いであった。

耐えることで人間は本当に成長するのだということ、耐える力を備えなければならぬと自らに言い聞かせている。

○「自分の価値を信じていることができるならば、他人の評価や中傷などに悩むことはない」ということも理解できた。

人間誰しも他人からは認められたい、賞賛されたいという願望がある。私も弱い人間である。他人を批判してしまつたり、自己弁護もする。

しかし、他人を批判するのは、本当にその人に怒りや憎悪を感じているからではなく、自分の欲求や思いが満たされない不満から他人を批判していることに気付かされた。

また世間には、異常なほど面子にこだわり、体裁を気にする人がいて、そのことで時々罵声を浴びせられることもある。

しかし自分に自信があれば面子にこだわる必要はないし、自分の価値を信じていることができるならば、他人の評価や中傷などに悩む必要はない。私は私なのだと思いきれないで、実際以上に自分を見せようとするから悩むのだということも、私自身のこととして理解することができた。

○「過去の失敗にいつまでもこだわってでは、決断がぶつてしまう」ということを身をもって感じた。

このところ些細なことに敏感になつてしまつている。失敗の教訓を生かすことに切り替えなければ、前には進めないし、判断がぶつてしまう。

そして決断の条件には、やはり実力が必要である。実力なくして決断できるものではない。そのためには、豊富な知識

を持つていることが不可欠であることをまざまざと思い知らされた。

○「自分を駄目にしてしまうのは自分自身である」と。

事実を無理に曲げて解決しようとしてはならない。ありのままの自分を受け入れれば安心感も得られる。

一人静かに時を過ごしてみると、自分のことが本当に明らかになつてくる。

人に対する怒りや憎しみの感情にはんろうされ、他人からの要求に「ノー」と言えないで、何か得体の知れない罪悪感に、自分がゆがんでしまつているような日々が続いた。

こんな時、一人静かに時を過ごしてみると、自分のことが本当に明らかになつてくる。

美しいものを見て美しいと実感する。人の悲しみを自分の悲しみとして共感し、気付かずに涙を流している自分に気付く。自分はこの人間であったと実感できる。そういう時を持つことで、自分を取り戻したい。自分を駄目にしてしまふのは自分自身であるから。

この一年を振り返つてのひとり言である。

※タイトルの「比翼の束」とは、市民と行政を翼に例え、ふたつを束ねてまい進するさまをイメージしています。